

○三宅島の降石原に見出されたゼニゴケとヒョウタンゴケ (大場秀章) Hideaki OHBA: Occurrence of two bryophytes on a eight-month-old scoria field in Miyakejima Island, Tokyo

伊豆諸島三宅島では 1643, 1712, 1834, 1874, 1940, 1962年と噴火を繰り返してきたが、再び1983年10月3日に噴火が起った。東京大学が行った火山島に関する特定研究の1員として噴火による植物相の変化を調べるため継続して渡島する機会が与えられた。

三宅島の植生は流出した溶岩、降石 (スコリア)、降灰、地熱上昇などの影響を受けた。噴火から8ヶ月過ぎた1984年6月でも、依然火口周囲では地熱が高く、数ヶ所で水蒸気が立ち昇り続けている。流出した溶岩の上にはまだ可視的な植物はみられない。かつてうっそうとした森林に被われていた新滞池西側は、多量のスコリアの堆積とその激しいボンピング(bombing)や地熱の急上昇による地下部の焼焦などのためもとの植生は一変した。少くとも林床植物はすべて枯死した。スダジイ、タブ、エノキ、オオバヤシヤブシ、ヒメユズリハ、ハチジョウイボタなどからなる森林を構成していた樹木もボンピングを受けほとんどが枯れたが、ハチジョウイボタ、タブ、スダジイ、エノキの少数の個体が幹生枝を出し新しい葉を展開していた。

この降石原には噴火後1ヶ月に *Pyronema omphalodes* (Bull. ex Fr.) Fuckel (菌類) が発生し採集されている。3ヶ月後には *Caloplaca* sp. (地衣類) が多量に発生した。*Caloplaca* は地表からわずかに突出した大形の放出岩塊の、主に東向きの地表面との境界に沿ってコロニーを形成していた。これはここで卓越する風の向きに一致している。海風が塩類を運び岩面に付着させ、その塩類が保水に役立っていると考えられる。

さて、1984年6月には数種の菌類のほかに、広分布をする2種のコケ植物、ゼニゴケ (*Marchantia polymorpha* L.) とヒョウタンゴケ (*Funaria hygrometrica* Hedw.) が見出された。2種とも1984年4月頃から出現していたようである。6月に調べた時はヒョウタンゴケは萌を多数つけていた。ゼニゴケは *Caloplaca* のコロニー上に生え、雌雄両株ともみられ、ともに生殖器官を有していた。ヒョウタンゴケはたき火のあとに好んで生えたとされ、ゼニゴケもヨーロッパでは山火事の跡などを好んで生える傾向があるという。この2種のコケが裸地化を受けた植生の初期に出現したと環境との関係については判っていない。

噴火直後の裸地にどのような植物が生えるのか植物学的に興味深い問題であるが、日本ではこの種の記録は少ないように思われる。三宅島のこの場所で今後どのような種が出現し、または消滅してゆくのか継続して観察を続けて行きたいと思っている。

同定や種々の御助言を賜った井上 浩 (科博)、柏谷博之 (科博)、北川尚史 (奈良教育大)、土居祥兌 (科博)、浜田隆士 (東大)、綿萩邦彦 (東大) 博士に感謝の意を表します。
(東京大学 総合研究資料館)